

令和7年度 第1回窪田空穂記念館運営委員会 会議概要

- 1 日時 令和7年5月15日（木） 13時30分～15時
- 2 会場 窪田空穂記念館 会議室
- 3 出席者
 - (1) 委員側
伊藤政子委員、大澤秀夫委員、大下一真委員、三枝浩樹委員、窪田潔委員、三ツ井夏月委員 6名
 - (2) 市側
博物館長 加藤孝、課長補佐（庶務担当係長）柳本真里、課長補佐（事業担当係長）山村里佳、事業担当 會田美保
窪田空穂記念館分館長 栗田正和、神田智代美
- 4 正副委員長選出
委員長 大澤秀夫委員、副委員長 窪田潔委員
- 5 令和6年度事業報告及び令和7年度事業計画
 - (1) 事業の評価について
令和7年度の事業は前年の事業内容を基本的には継続しているが、継続するということは何らかの評価があり、続けよう、意味があると、判断されているわけで、評価がないのに続けていくということはおかしなことになる。事業をやってみて、こういう所がよかった、意味があったと振り返りができればいい。
短歌講座は内容的には評価されると思うが、人数はこれでいいのかということ。人数だけでよし悪しは言えないし、生家のスペース的な問題もあってこれくらいで良いのかもしれないが。
企画展示のように発信しているものは、たとえ負担は大きく来館人数が少なくても積極的に行うことで記念館への機会を広げていくことになる。
子ども教室、学校との連携、交流などで、記念館というより、連携先に意味がないのに負担だけをかけていてもいけない。参加して楽しかった、意味があったと言えれば、他の学校へも広がり、波及していく。そういう意味での評価、振り返りは必要であると思う。（委員長）
 - (2) 収蔵資料公開について
新しい取り組みとして、博物館本館の特別展に分館の資料を併せて企画展示をするということを進めている。令和6年度企画展「生物多様性と松本」では、空穂記念館所蔵の資料を一部展示したが、自然界とプラス文学になると、空穂記念館に頼ることが

多くなる。今後も、文学とその他ジャンルという流れの中で、本館でも展示をしたい。これは新しい取組みとして、評価をいただけたらと思う。「空穂と源氏物語」は昨年大河ドラマ「光る君へ」の世の中のトピックスから担当学芸員が企画したもの。時流に乗った企画展示で、興味深く観覧したが、よい取組みであった。多くの方に関心を向けてもらう間口としてこのような取組みは今後も必要と思う。(館長)

→本館の企画展示に空穂記念館に限らず、分館の資料も結び付けて併せて展示をするということは意味あること。世の中のトピックスに結び付けた展示という、二つの新しいアイデア、方法で取組んだということは良いこと。学芸員が本館に集中してどうかということ、このようなやり方で示したということになる。空穂記念館の持っている資産を、本館での展示にアイデアとして出していくということ。(委員長)

(3) 短歌講座について

短歌講座は空穂会の支援があって成り立っている。短歌講座の機会があるということについて、講師の先生はどうか。(委員長)

→多くの人に空穂記念館に来てほしいことから、10月に記念館で短歌講座をやるよ、さあ行くぞと言うと、何人かが付いてきてくれる。そこで去年は「空穂と源氏物語」を拝見できてよかったねとなる。我々のルーツは空穂であるということを意識してほしいということがあり、一年に一度、記念館に伺うのはとても嬉しい。楽しくやっている。(委員)

(4) 子どもの短歌について

子どもの短歌は学校に応募を呼び掛けて、中根先生、小塩先生が選者になっているが、表彰式はどのようにやっているのか。賞品はあるのか。(委員)

→現行、最優秀賞の児童生徒の学校を訪問して、賞状、記念品を渡している。最優秀賞は図書券3,000円、優秀賞は図書券1,000円、空穂会賞は100円程度のシャープペンシルを記念品としている。(分館長)

→子どもの時から短歌に親しむのはいいこと。私たちも短歌大会の中で、大人だけではなく、小中高生の短歌を募集している。ここで、お願いをしたいことは表彰するだけではなくて、子どもたちの前で、これが良いとか、このように短歌を作るといいと、講評兼講座のような形で、表彰をするといい。他の短歌大会でもそうだが、ジュニアの部でも選評がある。表彰には選評があり、それが大事であると思う。表彰に誰が来てくれるか、選者の先生方はお忙しいのは分かっているが、子どもたちに味わい方を知っていただくという機会として、活かしていただけたらと思う。(委員)

→同意見、せっかく子どもの短歌を募集して、応募が3千首近く。中根先生、小塩先生が選歌し賞を選んでいる。費用が関係するかもしれないが、優秀な作品の受賞者には記念館に来ていただいて、選者が講評すると良い。直接、選者と選ばれた子どもたちのふれあいの場が設けられると一番良い。(委員)

→先ほど、観光と教育という二つの向きが館長から示された。体験型の観光もある

が、素人考えでいえば「観」は見ること。教育には体験し、成長していくという変化、成長がある。観て、写真と同じだと、それで終わりというのではなく、観光も本来的には、異文化と接する体験である。短歌を詠んで選ばれたということは、賞品をもらったという成功体験のみでなく、子どもの成長体験として、コメントを受けることができれば良い。予算も必要で難しいかもしれないが、コンテストの意味は、子どもたちが短歌を通して、自己表現、自己実現をしていく体験。小学校では子どもたちが短歌を作るという体験の場を持つことができるのか。(委員長)

→教科書に短歌は載っている。募集があれば授業の一環として短歌を作る。クラス担任であったときに応募した。ただし、短歌の作り方は先生方もあまりよく知らない。とにかく五七五七七で作れば良いという程度。最近、『プレバト!!』というテレビで、俳句を芸能人が作り、先生が講評している。すると俳句とはそういうものかと解る。プロの説明を受けて、この短歌の良さはここだと、子どもたちにプロの話を聞かせることは大事なことと思う。もし、来ていただけるなら。(委員)

→私もこの記念館に来るようになって、短歌を作ってみた。どうしても短歌にならないで、俳句なのか、川柳なのかと、やめてしまった。修練してきた人にコメントしてもらおうと、ああそうかと、一つ二つ解ることがある。芝沢小学校は地元で空穂の母校の小学校なので、全市内は無理でも実験校、先進校としてやってみると広がる。芝沢小学校や高綱中学校で短歌クラブができたら面白い。(委員長)

→学校に負担はかけられない。今の時代、学校に負担のかからない方法を考えてみたい。(分館長)

→今のかたちを活かすとしたら、最優秀賞の学校に表彰に行くのであれば、その学校、学年に、この短歌のいいところはね、との説明であれば負担はない。子どもたちもどうしてこの作品がよかったかと分かる。応募した子どもは実感がわく。応募しない子どもは聞いても何も入ってこない。(委員)

→子どもの短歌の選者の中根先生、小塩先生や短歌講座の講師も教壇関係者、学校の先生であり、子どもに話しをすることは良い。楽しい。(委員)

→子どもの短歌の作品集は立派なものが刊行されている。表彰式に選者の先生が出向くという、その手前での折衷案として、優秀な作品をピックアップし、選者から作品へのコメントを寄せる。本当は表彰式でコメントすることが理想だが、作品集に具体的なコメントを掲載する。これまでのような総評ではなくて、この作品はここに魅力を感じたというコメント、受賞する子どもたちが参考になるような具体的ポイントを、作品集に組み立てるようにしてみればどうか。(委員)

(4) 企画展について

昨年企画展は担当学芸員がよく頑張ってくれたが、『空穂と源氏物語ー古典文学の世界』は期間中324名の方に見ていただいたということ。私も楽しい時間を過ごした。私の率直な印象で言うと、展示は充実していた。しかし、展示だけを見ていては、担当学芸員がイメージしていたことは伝わらない。表面的に展示だけを見て、通

り過ぎてしまう。私は依頼して担当学芸員の説明を受けたが、平面的なものが立体的に見えて、感動を覚えた。しかし、説明を受けないと印象が薄く会場を後にした人も多かったのではないか。どこの文学館でもそうであるが、企画展を開催する場合、学芸員がいて説明、質問に応じている。学芸員が大変になるが、企画展を開催するのであれば、できれば学芸員には常駐していただいて、説明をいただきたい。今年の企画展『近代と文藝－空穂が見た明治の文学運動』では、学芸員にできるだけ常駐していただければ、展示の質的な成果がでると思う。（委員）

→今年の企画展期間中では、前回行っていなかったギャラリートークを9月に1回、10月に1回、計2回行う予定。広くプレスリリースし、一般の方に来ていただけるようにしたい。（事業担当）

→素晴らしい。（委員）

→提案と答えが響きあっている。一方的に観るだけではなく、そこでコミュニケーションが起こるという展示のあり様ができる方向でありがたい。（委員長）

(5) 事業計画について

分館長からの報告どおり、今年度、窪田空穂記念館は観覧料無料、休館日は毎週火曜日、文化観光部のもとであると。この大きな転換期の中での事業計画となる。既にアイデアは出ているが、公民館と連携して、この地域の中で、単に過去のものがあるというのではなく、文化創造的な分館であればいいと思う。空穂書簡の購入予算はとれているのか。予算がないなどと言われては。（委員長）

→既に購入済。今回、多くの分館が無料になることで、無料館の整備はしないのかという議論がある。一貫して、説明しているのは有料、無料に関わらず、必要な整備は優先度を測りながら進めていく。今回の資料にもあるが。記念館南側駐車場インターロッキング補修工事は3年越しになってしまっているが、15分館ある全体の中で人命、危機に関わるものなどで優先順位があり、できるものから徐々に行う。時間はかかるかもしれないが、どの分館も切れ目なく行っていく。（館長）

他館との連携には興味がある。現在、講座など興味のあるものはチェックして参加している。博物館の講座にも今年は3回くらい出席している。あがたの森での講座、塩尻市のえんぱーくにも行く。えんぱーくは、松本であれば「まるごと博物館」と重なるのかもしれないが、講座情報が一枚の紙で集約されている。松本市では実際に塩尻市以上に色んなことを行っている。公的機関だけでなく、私は『平和の種』の初めからのメンバーであるが、市民運動的な講座もある。講座情報を時系列で並べてみるが、松本市博物館の情報がネットでもいいが、時系列で出ているとありがたい。この企画、この領域と横並びで並んでいるが、松本まるごと博物館の分館毎の掲示ではなく、一目瞭然になるようなものがあるといい。（委員長）

→広報まつもとは月1回の発行であるが、その中で「博物館の催し」専用の1ページがある。ただし、時系列でない。本館の例でいうと、短期間の準備で行うものがあり、印刷では間に合わなくなる。数は多くはないがウェブ、ホームページでの案内に

なる場合もある。(館長)

→結局は主催者側の事情優先の配列で、ユーザー目線でいうと、講座に行けるかいけないかは時系列で決まる。そういう意味では時系列の一覧表があるといい。(委員長)

→以前は時系列の一覧表を作成し、紙でお配りしていた。ホームページでも掲載していたが、日程変更になることもあり、紙では作成しなくなった。(山村課長補佐)

→ウェブ上でも時系列の一覧表はないということか。(大澤委員長)

→ありません。ご意見は胸にとどめて、いい方策があるか考えていきたいが、1年前にイベント予定していくのは難しい。(山村課長補佐)

→1年前でなくても良い、1か月先でも1週間前でも良い。ユーザー目線で、講座は私自身の成長だから。その時に時系列があれば選べる訳だ。(大澤委員長)

→博物館本館のホームページにはイベントカレンダーがある。博物館施設の全体のホームページでは、松本まるごと博物館のホームページがあるが、分館の案内を基本としているが時系列でなく、分館によって方針の差がある。いただいた意見は今後の研究課題としたい。(館長)

→『平和の種』の機関紙だと、最終ページに時系列の講座一覧表2か月分を掲載している。そうすると、選択できる。(委員長)

→広報に関連して、SNS等でイベント発信はしているのか。松本城のInstagramのフォロワー数は、日本一になったというニュースを見た。松本城のInstagramとは別の話だが、学生は企画展を知る機会がない。公民館に行ってみないと分からないというのでは、知る機会がもてない。どうしたら情報に接することができるのかと思っていた。(委員)

→博物館本館はInstagram、エックスの運用をし、ほぼ毎日更新をしている。特別展の開催、開館休館を含めて、本館はSNSの運用をしている。松本城のフォロワーは2万人を超えて、お城では1位。博物館は1,800人位で、SNSのフォロワーを増やすことは課題。博物館本館は高校生が勉強に來たりしている。本館は指定管理者が運営しており、イベントの有無、休館日など分かるように高校生にフォローしてもらおう、フォロワーになってもらうと話をしている。大学生を含めて、SNSのフォロワーをどうしたら増やせるのか考えている。来館時に絵葉書をプレゼントするなどフォローアップキャンペーンを行っているが、運用の中で広めていきたい。また、博物館施設全体を考えると、これも今後の研究課題。若い世代は新聞、テレビを含めて見ない。SNSが響く、周知するところとなっている。各年代でメディアが違う、媒体が違う。色々なチャンネルを使わないと多くの世代の参加は得られないと、職員にも言っている。いいお知恵があれば大学現場の方からも教えていただきたい。

(館長)

→フォロワーが増えれば、もちろんいいことであるが、常に更新がされていること。今日は松本に行ってみよう、開館か臨時休館かというときに、生きた情報に接することが大事。(委員)

→博物館本館は毎日、SNSで発信している。（館長）

→今後も続けてほしい。（委員）

→分館も、今日の空穂とか、空穂日めくりとかできればいい。今日は何の日のように短歌が出てくればいい。（大澤委員長）

→時々紹介していただいてもよい。（委員）

→松本城のインスタグラムの立ち上げに係わっていたが、フォロワーが2万人を超えたというのは、松本城という素材が良かったこと。どこで撮っても映えて、また、日々の職員が職員目線で紹介しようと、ある意味素人臭さがフォロワーの広がりを生んだと分析している。（館長）

→空穂記念館では、現状、ホームページのイベント情報でお知らせをしているが、毎日の発信まではできていない。何かことあるときはホームページではお知らせをしている。（分館長）

(5) 結びの言葉

窪田空穂記念館の存在は知っていたが、このような色々な事業をしていたと始めて知った。記念館がある地区の学校として、かかわりを深めたいと思う。（委員）

大事な空穂記念館であり、よろしく願いたい。（委員）

芝沢小学校で、地元で何か取っ掛かりができれば楽しいと思う。空穂の魅力、空穂が知られているのは未だ一部分で、本当の良さが解ったらもっと空穂への関心は広まる。大岡 信が『窪田空穂研究』という本を書いているが、空穂の魅力を明晰、明確に示しており、空穂はこんなに偉大で魅力のある歌人であったかと解る。空穂はポテンシャル、可能性がある。皆で空穂記念館の活動を支えていきたい。（委員）

百人一首教室でお世話になっているが、囲碁、将棋はもちろん、子どもたちがふれる場があるというのが大きな財産だと思っている。小倉百人一首は文学的な要素があり、歴史があり、我々が協力しているような競技的な面など、実は切り口がたくさんあるコンテンツだ。記念館は学童保育にいただけでは触れることのできない貴重なイベントを多くやっている。今後も一緒に参加していきたい。（委員）

SNSの話題があったが、ユーチューブで窪田空穂を検索すると、ヒットした。びっくりしたが情報が古い。SNS、Instagramにしてもどこを検索させるか、キーワードが重要。窪田空穂の検索で、ヒットするのは多くはない。和田公民館としては短歌の切り口はもちろん大事だが、和田の情報発信基地、歴史発信基地として協賛していきたい。（副委員長）

窪田空穂は豊かな資産であり、皆で活かしていきたい。（委員長）